

極限のリーダーシップ

「地球が壊れると思った」という揺れと津波後、被災者は着の身着のまま避難に駆け込んだ。飢えと行き先が見えない不安、知らない人間同士を寄せ合い、生き抜くため、避難所はいかにして立ち上がり、どう運営されたのか。

宮城・石巻の7日間

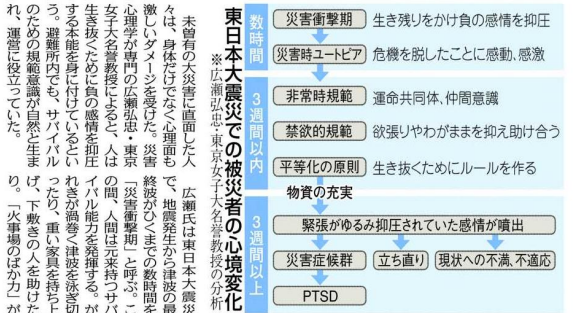
三月十日、沿岸の食料を確保するしなご入れ、「今日の分り禁止した」と西野さんに頼む。その学校へ交員に見せるように「ちゃんがない」とを証明して寺のいくつかに教室を確保し、被災者を優先して受け入れられた。西野さんは、被災者と「目の前の人」として接する。被災者の中には「目の前の人」として接する。被災者の中には「目の前の人」として接する。

食料調達や分配奔走

三月十日、沿岸の食料を確保するしなご入れ、「今日の分り禁止した」と西野さんに頼む。その学校へ交員に見せるように「ちゃんがない」とを証明して寺のいくつかに教室を確保し、被災者を優先して受け入れられた。西野さんは、被災者と「目の前の人」として接する。



津波が襲った直後の渡波小学校。避難所はこれより約一キロ離れた山形県吉野町に設けられた。写真：吉野町百代さん提供



未曽有の大災害に直面した人々には、身体だけでなく心理面も激しいダメージを受けた。災害終結がいつまでか分からないという状況で、被災者は「災害時ユートピア」を求め、生き抜くために助け合う。被災者は「災害時ユートピア」を求め、生き抜くために助け合う。

「生き延びる」規範生む 物資充実に感情噴出も

被災者の間で生まれたのが「ユートピア」と呼ばれる「非常時規範」。運命共同体、仲間意識、禁欲的規範、平等化の原則、物資の充実、緊張がゆるみ抑圧されていた感情が噴出、立ち直り、現状への不満、不適応、PTSD。被災者は「災害時ユートピア」を求め、生き抜くために助け合う。

西野さんは、被災者と「目の前の人」として接する。被災者の中には「目の前の人」として接する。被災者の中には「目の前の人」として接する。被災者の中には「目の前の人」として接する。

東日本大震災で各地に設けられた避難所では、医師らほどのような救護活動を展開したのか。宮城県の被災地などに三度赴いた名古屋第一赤十字病院（名古屋市中村区）の救急部長・花木芳洋医師に聞いた。

（聞き手・林勝）

— 現地の活動で感じたことは。
私たち初動班は三月十二日に被災地に入った。今回の震災は津波にのまれて亡くなった人が多く、地震で大けがをするなど救急医療が必要な患者は少なかった。その代わり、避難した人たちは「今後、医療を受けられるか」を心配していた。糖尿病の治療など

— 通院が必要な人もいたが、地元
の多くの病院が被災した。宮城県白石市では、市内の医療機関の被災状況を調べるように市に依頼し、診療可能な病院などの案内を市役所玄関に掲示すると、安心する方がたくさんいた。そういう医療情報の重要性を感じた。

— 避難所で救護班が気に掛けた

名古屋第一赤十字病院

花木芳洋さん

避難所の医療 — 医師に聞く

— 避難所によっては人の密度がと
ても高いところがあった。そうす
ると、体を動かすことが極端に少
なくなるので、血管内に血栓がで
ては復興の妨げになってしまう。
— 震災直後、避難所を支える人
手は不足していたのでは。

衣食住役割分担を

— きて肺塞栓症（いわゆるエコノミ
— クラス症候群）などの病気に
りやすくなる。私は救護班として
指示し続けたのは、体が弱くても
動ける人にはできるだけ食事の場

— 本来なら医療の役割でない多種
多様な要望があった。食料や毛布
の提供、手洗いの水の用意、足腰
の弱いお年寄りに段ボールで簡易
ベッドを作った医師らもいた。確

— 所まで歩いてもらうこと。支援し
すぎることでは病気の原因をつくっ
ては復興の妨げになってしまう。
— 震災直後、避難所を支える人
手は不足していたのでは。

— かに、衣食住を整えることは病気
の発生や悪化を抑える。しかし、
そうした役割まで医療側が引き受
けることになると、専門性が発揮
できなくなることがある。
— 行政職員や被災者を含め、住民
がそれぞれ役割を果たそうとすれ
ば、医療態勢も整いやすく、質の
高い活動ができる。もし、大都市
が被災した時に地域のコミュニテ
ィーが機能しなかったら、おそら
く医療活動もままならなくなる。
災害時に医療がすべき役割をあら
ためて多くの人に考えてほしい。

ごめんね、なずな…

「怖い」という気持ちは、いつの間にか薄れていた。原発から3km圏内の一時帰宅が実施された1日、地元の福島県大熊町が仕立てたバスに揺られながら、幸さんは帰宅の喜びをかみしめていた。車窓から海が見えると、誰からともなく歓声が上がった。「当然だよ。おれたち、波

の音を子守歌代わりに育ったんだから」。幸さんの隣で、光一さんがつぶやいた。とはいえ、感傷に浸る時間はなかった。一時帰宅で与えられたのは2時間。バスを降りると、2人は一目散に自宅へ向かった。手元の線量計は毎時50μSv超を指していた。緊張と焦り、残暑の日差し。防衛服の下で汗が滝のように流れ落ちた。懐かしいわが家はもう目の前にあった。けれども、表札の掲げられた門の前で、2

原発10キロの避難
いつの日か

—14—

人の足が止まった。門の上に、うずくまるようにして白骨化した猫の死骸があったからだ。

「なずー」。幸さんは思わず叫んだ。震災当日、自宅を飛び出していたため、連れてくることのできなかった飼い猫「なずな」と直感したからだ。「私たちをずっと待っていたんだね。ごめんね、ごめんね…」。言葉が続かなかった。光一さんに促されるまま、幸さんは自宅

のドアを開けた。だが、目に飛び込んだ光景に思わず目を背けた。「家の中がすっかり色あせて見えたんです。まるで灰色の世界だった」

福（はなわ）さん一家 原発事故で大熊町から避難。光一さん（43）と妻幸さん（43）、次女沙也加さん（15）は愛知県豊田市で暮らし、福島県会津若松市に移った。長女梨奈さん（18）は東京で大学生生活。